慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伊藤邦武著『経済学の哲学：19世紀経済思想とラスキン』
Sub Title	
Author	武藤, 功(Muto, Isao)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2012
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.105, No.2 (2012. 7) ,p.275(167)- 278(170)
JaLC DOI	10.14991/001.20120701-0167
Abstract	
Notes	書評論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20120701-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」105 巻 2 号（2012 年 7 月）

書　評

伊藤邦武著

『経済学の哲学
——19 世紀経済思想とラスキン——』

中央公論新社，2011 年 9 月，280 頁

1．本書は，19 世紀ヴィクトリア朝時代のイギリスに生きた藝術批評家にして，社会思想家であるジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819–1900）の経済思想を現代的な視点，とりわけ哲学的な視点から新たに読み解こうとした野心的な書物である。

著者の伊藤邦武氏はすでに『人間的な合理性の哲学』（勁草書房，1997）や『ケインズの哲学』（岩波書店，1999）を上梓し，経済学に関して哲学的な反省を加えるという作業をしてきた。これらの著書において批判的な考察の対象とされたのは，パスカルやコンドルセ，ケインズやラムジーといったいわば超一流の思想家たちであった。ケインズやラムジーなどに比べれば，本書の主人公であるラスキンは，どう贔屓目に見たとしても経済学の世界では格下の存在でしかない。それが，一般的な評価であろう。そうだとすれば，いまラスキンを論じることの意味は奈辺にあると伊藤氏は考えているのか。

ラスキンは当時，藝術批評家としてはすでに高い名声を得ていた。そのラスキンが，当時興隆しつつあったリカードや J・S・ミルの経済学にたいする批判へと知的な思想活動の舵を切ったのであった。しかし，経済学に関してはまったくの素人の経済学批判にたいする世間の反応は厳しく，彼の論文が雑誌に掲載されるや，「素人のたわごと」「耐えきれない無駄話」「完全なナンセンス」と決めつけた。やがて深い影響を受けることになるホブソンなどを除けば，概してラスキンの経済思想にたいする評価は低い。

しかし，世紀が変わって 20 世紀になると，徐々にではあるが理解者が現れるようになった。ごく一部の例を挙げると，1906 年にはイギリスの労働党の設立にかかわったウィリアム・モリスは，ラスキンの弟子であるが，彼の経済学批判の主要著作『この最後の者にも』（1862）を一種のマニフェストとして重んじた。また，『失われた時を求めて』の著者マルセル・プルーストの文学には，ラスキンの思想や藝術批評が色濃く影を落としている。さらに，インドで非暴力の独立運動を指導したマハトマ・ガンディーも「自分の生涯を決定した唯一の書」として，この書物を称賛した。ただこれらは，ラスキンの思想の文芸・藝術批評や社会・政治思想の側面に重点をおいた評価であった。

さらに世紀が変わって 21 世紀。ようやくラスキンの経済思想にたいする再評価の時機が訪れてきたのではないか。

現代のわれわれは，とりわけ人間と自然とのかかわりについて，それはいかにあるべきか，という大きな問題と向き合っていかなければならない。ましてや，日本人としては，未曾有の大震災という自然災害や原発事故という人災を目の当たりにしてしまったのであるから，人間と環境との共存というテーマは，なおさら重要なテーマとなったはずである。ラスキンの経済学批判は，こうした人間と環境，人間と自然との共存といった問題にたいする答えをわれわれに静かに指し示してくれるのではないか。あるいは，ラスキンの経済学批判は，われわれにとって喫緊かつ重要な問題である「エコノミーの発想とエコロジーの視点」という課題を再考する手掛かりを与えてくれるのではないか。

語源的に言えば，「エコノミー」は，家（オイコス）を意味するギリシア語の「エコ」に「ノモス」（規律，規範）という語が結びついたものであり，「エコロジー」は，同じく「エコ」に「ロゴス」（論理，学問）が結びついたものであるから，両者は本来一体となって然るべきなのである。ところが，エコノミーの発想とエコロジーの視点は，今日で

は「かなりかけ離れたものとなり，場合によってはかなり反発しあう」問題意識となっている。しかし，ラスキンの古典派経済学にたいする批判を読み解くことは，両者の本来あるべき関係を問い直すきっかけを与えてくれる。そしてラスキンとともに，価値についての哲学的な反省を通じ，21世紀における価値一般をめぐる哲学的思索にたいする有益な示唆が得られる可能性があるのではないか。伊藤氏のこうした見立てが，本書でラスキンを取り上げる理由となっている。

2．そこでまず，伊藤氏の論を追いながら，ラスキンの藝術の理論の移り変わりをごく簡単に概観する。そしてそれが，いかに彼の経済学批判に結びついていくのか，このことから話を始めたい。

藝術批評家としてのラスキンは，その大胆な自然描写ゆえに自然に即していないと酷評され始めたターナーの藝術を，それこそが自然の真の姿を表しているとして擁護した。彼のこのターナー擁護は，自然を神の摂理と見る素朴な自然観，自然のもつ美醜の一切をありのままの姿で容認する自然主義によって支えられていたが，彼はやがてこうした立場には懐疑的になり，ターナーからも離れていった。彼の関心はルネサンスや西洋中世のゴシック建築に移っていくが，その過程で，自然への視点も，崇高な山々の輝かしい頂点ではなく，裾野に広がる山野へと移っていった。そしてそこに繰り広げられる人々の粗末な生活様式，労働，悲しみの諸相がラスキンの心を捉えたのであった。

彼の思想の変化は，藝術にたいする純粋で宗教的な畏敬の念から，より深いヒューマニズムへの進化と言い表すことができる。ラスキンは，この進化のプロセスが辿りつく先に「ゴシックの自然主義」ないしは「中世的なヒューマニズム」と称される体系的な価値観を打ち立てた。それは，人々が共同的な労働を行うことで価値あるものを生み出していくことこそ，この世にある一切の価値の基礎であるという，人間の生についての根本思想であった。ラスキンにとっては，人々の労働こそが一切の価値の源泉である。「生以外に価値はない」――これが彼の提示した根本テーゼである。このテーゼを提唱するにあたっては，労働は「苦」ではなく，人間の内的精神の表現，自由の発露であると考える根本的な思想の転換が必要だったのである。そして，ラスキンのこのユニークなヒューマニズムの思想が，社会分析や富についての哲学的反省と結びついて，彼の経済学批判のモチーフを形成していくことになったのである。

3．ラスキンが批判の標的としたのは，リカード，J・S・ミルの経済学であった。古典的ポリティカル・エコノミーの代表的理論家である彼らの経済学は，ベンサム流の功利主義哲学と結びつきながら，科学としての体系を構築してきた。その理論を支える価値論は，経済的価値を端的に交換価値と規定し，それを土台とした彼らの経済学は「所有と使用の対象としての価値の流通メカニズム」を追求した商業経済学である。ラスキンにとって，それは「商業経済」の自画自賛に偏ったものであり，決して社会（ポリス）全体の健全な維持・管理を図る術を追求する学問にはなっていなかった。しかもそれを生み出す主体として，あまりにも抽象的な経済人の概念を前提としている。しかしそれは，ラスキンにとっては過度の抽象化によって作られた大規模な幻影にすぎなかった。

「生以外に価値はない」というテーゼを掲げるラスキンにとって，古典派の「富の追求」は，決して「生という富」に結びつくことはない。ラスキンによれば，古典派の経済学の誤りは，生とは快楽の追求であり，労働は苦痛以外のなにものでもなく，富は苦痛を減少させ快楽を増加させる手段だと理解している点にある。利己的な経済的利益，快楽のあくなき追求は，他人や周囲の環境にたいする配慮を欠くことになり，道徳的にも劣悪な社会を形成してしまう。ラスキンは，古典的な欲望と労働の観念を軸とした人間の理解には，根本的な批判が必要であると考えた。

この功利主義的な経済理論を批判するにあたっ

て，ラスキンは古代ギリシアの経済思想，とりわけクセノフォンやプラトンの経済思想，「価値」の思想を援用している。この「古代の経済思想を活用しようとする彼の議論は，当然のことながら基本的に昔に返れという呼びかけであるというよりも，未来に向けての提言」のためである。いささか時代錯誤とも思われるこの手法をとることは，新しい視点を確立するためには原点に立ち返って考える必要があるという考えにもとづいたものだったのである。そして，ラスキンの手によって，古代ギリシアの経済思想に新たな息吹が吹き込まれ，それが現代に蘇った，と積極的な評価を下すことも可能であろう。

ラスキンの経済学批判の主要著作である『この最後の者にも――ポリティカル・エコノミーの基本原理にかんする四論文』は，小冊子ながらも読み進めるのに苦労する書物である。伊藤氏は，ラスキンの四論文における議論の筋を丁寧に追われ，それを的確に整理されている。ラスキンのこの難解な書物を読み進めるにあたっては，随分と役に立った。本書はこれからも，ラスキンに取り組もうとする者にとっての最良の手引きになるに違いない。

ラスキンはこの書物において，リカードやミルにおける「需要」「労働」「消費」「価格」といった概念を批判的に検討し，その結果として新たに「富」や「価値」の概念を規定する。「需要」をはじめとするこれらの概念は，単に商業的交換の観点から理解されるべきではなく，われわれの生における実際の志向や願望といった精神的な観点から捉えられるべきだと言う。その結果として，ラスキンが提示するのは，功利主義の原理に取って代わる新たな「最大多数の高潔にして幸福な人間」という原理にもとづいて構想される「穏やかな経済」というヴィジョンである。高潔な人とはその人自身の「生の機能を完成させることで，他の人の生の上にも役だつ影響力をもつ」人のことである。それは自分とともに社会の他の人の生を豊かにしたいという「愛」をもつ人であり，そのために自分の能力を発揮しようとする「勇気」をもつ人のことである。

ラスキンの言う「名誉ある富」を志向する「穏やかな経済」のシステム，「きれいな空気と水と大地」の社会とは，自分とともに他人の生を充実させるべく，積極的に自分自身の「手」を使おうとする人々が織りなす生産と消費のシステムのことに他ならない。これは，原子的個人を分析の出発点とする経済学ではなく，社会の有機的なつながりを分析の出発点とする経済学を目指すものである。そして，生という意味での富を増大させるべく生産と消費の調整を図る者――これが，ラスキンが経済学者に求めた「守護者」としての役割であった。

ラスキンにとって，経済的価値とは，生産の量ではなく，労働と消費の質によって評価されねばならないのである。こうした彼の経済思想は，社会の富を，人々の道徳的な品位の向上にいかに貢献したか，その貢献度に応じて評価しようとする。その意味で，彼の経済思想はロマン主義の系譜に属する。しかし，ラスキンはロマン主義的な思考法に内在する一面性，耽溺性について，すでに自分の美学的研究を通じて十分に自覚していた。彼にとって重要なことは，単に労働を讃美することではなく，その質を評価する基準を確立することだったのである。このことが，ラスキンの経済学批判に単なるロマン主義的な憧憬の表明を超えた実質的な力を添えているのだと思われる。

4．ラスキンは，「名誉ある富」にもとづく社会を構想し，その社会の健全性のメルクマールとして自然環境ということを考えた。現代のわれわれは，彼のその思想のどこに積極的な意義を見出すべきなのであろうか。

ラスキンの経済学批判は，独特なエコロジカルな問題意識を投げかけている。それは，もちろん人間と自然との調和的共存の維持や回復を目指す「自然のエコノミー」という発想に支えられている。だが単にそれだけではない。それは，自然や環境

の破壊が，人間の精神の荒廃，思想的堕落と密接に連動しているという視点もあわせ持っているのである。ここにアルネ・ネスが提唱する「ディープ・エコロジー」といった現代の環境思想との関連を見出すことができる。

ディープ・エコロジーの思想は，「いわゆる西洋の近代思想に見られる人間中心主義を徹底的に否定して，自然そのもの，あるいは地球それ自体が意識をもち，価値や権利の主張の主体となり，人間の侵犯や破壊にたいして抗議の声をあげうるものだ，という思想」である。この思想は，自然環境の汚染や資源の枯渇といった自然の物質的・経済的条件よりも，それを生み出してきた人間の思想的態度に批判の矛先を向け，人間と環境のあり方の改変を目指そうとする。

この思想は，確かにラスキンの思想の系譜に属するが，それを現代的な観点から塗り替えてしまったところがある。伊藤氏は，かえってそのことがラスキンの提起した問題を見落としてしまう恐れがある，と指摘する。それはどういうことか。現代のディープ・エコロジーは自然物のすべては，それ自身の基準に即した形で，それぞれの権利要求をもつ，と考える点で，きわめて「反」人間主義的傾向を有する。一方のラスキンの思想は，古典的なポリティカル・エコノミーの価値論と人間理解にたいする内在的批判を基盤としている。その意味では，あくまでも人間を中心にした社会理論なのである。

伊藤氏は，ラスキンの思想が，現代のラディカルなエコロジー思想がはらむいくつかの疑問や矛盾については，それを回避しうるという長所をもつ，と主張する。ディープ・エコロジーは，あらゆる生命にたいして徹底的な平等主義の立場をとる。それゆえに，「あらゆる生命の損壊にたいする原理主義的な禁止という，それ自体抑圧的で一元的な抑止的思考に転化しかねない危険性をもっている」と言う。また，伊藤氏の言うように「自然そのものにたいして何かを要求したり訴えたりする「権利」を，比喩ではなく文字どおりに認めるという発想も，けっして分かりやすい議論ではない」と思われる。ラスキンの思想はこの点で，ヒューマニズムに立脚しつつ，人間の精神と自然の健康とをお互いがお互いを照らし出す鏡のような存在と見るがゆえに，人間中心主義の傲慢と過激な生命平等主義の不条理とを，ともに回避している，と評価される。私も，この伊藤氏の評価は妥当であり，ラスキンの思想のもつ積極的な意義もここにこそ見出されるべきだと考える。

5．こうした評価が，本書において伊藤氏が立てた当初の問い（＝見立て）にたいするひとつの解答にもなっていよう。伊藤氏自身がラスキンの思想にたいする適切な評価を明確に語った本書の第三章は，とりわけ読み応えのある内容からなっている。

ラスキンの経済学批判を，文字どおり経済学にたいする批判としてだけ見てしまうと，単なるお伽話を読んでいるような気にもなってくる。しかし，ラスキンが経済学批判を経て辿り着いた，人間と自然，人間と環境という大きなテーマのなかで，改めてその経済思想を位置づけてみると，どうだろうか。伊藤氏がしたように，そうした作業を通じて，ラスキンの思想が，自然と環境との共存という問題にたいする思索ばかりではなく，（アマルティア・センの問題意識と通底するような）経済学の短所を補う作業のための思索へとわれわれを駆り立てる思想として生き返ってくるのではないか。本書は，哲学と経済学がともに手を携えて歩むべき道を，きわめて建設的な議論として提示したという意味で（わずか本文200頁余りの新書ではあるが，ギッシリと内容が詰め込まれているから，けっして読み進めるのは楽ではないが）好感のもてる書物である。

武藤　功
（防衛大学校人文社会科学群公共政策学科教授）